

# 土木学会選奨土木遺産、危険 海域を灯す優美な石造り灯台

つのしま

## 角島灯台

山口県下関市



「長門海中西北間ニ孤立セル小島ニシテ、馬関ヨリ北海へ航スル船舶ハ皆此ノ島岬ヲ標的トシテ磁鍼ヲ定ム、然ニ其四辺暗礁多ク常ニ逆波ヲ起ス、故ニ風雨ノ夜等ハ航海者ノ危難少ナカラス、最緊急ノ場所」

明治6年（1873）、わが国工業の父と言われる山尾庸三が工務省正院へあてた伺いで、「関門海峡から日本海を航行する船舶は全て角島をめざしているが、その周囲は暗礁が多く危険地域なので、最優先で灯台を建てる必要がある」というものです。近世の北前船の航行においても瀬戸内海から響灘を経て日本海への航路へ向けて操舵するのが角島の沖でしたから、如実に物語っている内容といえます。

わが国における洋式灯台の建設は、英仏蘭米が日本近海を安全に航行するために8カ所の灯台を要請した幕末に遡りますが、わが国の近代化にとっても海運の整備は急務でした。そのような状況下、明治2年（1869）わが国最初の洋式灯台「観音埼灯台」が横須賀に完成し、その7年後、日本海側最初の灯台「角島灯台」が建設されました。

英国人技師リチャード・ヘンリー・ブラントンは9年間の在任中、石造り、木造、鉄造、煉瓦造りと多くの洋式灯台を遺していますが、特に組積造のものは形がよく似ています。灯塔は上にすぼまった円筒形で、その足元に扇型平面の付属舎がつき、灯ろうは鉄製、半球状のドーム屋根が乗っています。このデザインはスコットランドの灯台に特徴的に見られるもので、明治期の日本の灯台の外観はスコットランド系と考えてもいいそうです。

ブラントンの遺した灯台の中で、デザイン的・技術的にみて完成度が高いのは角島灯台といわれています。塔の外部は徳山産の御影石、内部も花崗岩切石で、105段の螺旋階段が外壁と組み合わされて堅固な造りとなり、細部にまで行き届いた造作となっています。

また、付属舎の鑄鉄製暖炉から階段手すりに至るまで、当初のものが残されており、かつての灯台の姿を思い起こすことができます。

離島ゆえに日常生活や経済活動に大きな支障をきたしていた角島でしたが、平成12年（2000）角島大橋が開通しました。橋も角島灯台も本来の機能はもとより、観光資源としても島の未来を創造する役目を果たすことでしょう。



平成12年（2000）、延長1780mの角島大橋完成

### ■位置図



角島灯台の灯塔は円筒形で、外周にはテラスが周り、鉄製の縦格子の手摺がつく。正八角形の英国製フレネルレンズを使用



日本の灯台50選の角島灯台と灯台記念館（旧吏員退息所）  
イギリス人技術者リチャード・ヘンリー・ブラントンが建てたなかで美しいとされる石造りの灯台